岐阜大学 地域科学部 地域資料・情報センター

地域史料通信　第２号

２０１０．１０

（岐阜大学教育学部郷土博物館所蔵 村絵図 142、以下、特に所蔵を明記していない史料は、教育学部郷土博物館所蔵のものです）

これは、江戸時代の飛騨国の「中山村」を描いた村絵図です。一番下の濃い色は川の流れで、真ん中の赤い線は道筋です。道を挟んで人の名が記され、家屋があった場所を表しています。また、田や畑のあった場所は文字で表し、絵図の端には村高※が記されています。

当時の飛騨国には、中山村が２つありました。現在の高山市内と飛騨市内にあたり、どちらも川が近くを流れており、村の規模もほぼ同じくらいです。どちらの中山村なのか、はじめはわかりませんでしたが、郷土博物館にある村絵図の整理をしていく中で、高山市内のものと判明しました。さて、どうして確認できたのでしょう？

※村の規模を、米の収穫高に換算して表したもの。

答えは４ページから

目　次

はじめに―活動余録―／史料整理のツボ―文書箱・封筒―　……　2
飛騨国の村絵図～描いたのは誰？～　……　4
交流コラム／地域資料・情報センターの活動／編集後記　……　8

はじめに　― 活動余録 ―

岐阜大学地域資料・情報センター運営委員（地域科学部准教授）　　朴澤直秀

これまで、史料を探して、全国各地の自治体で設置された文書館などをかなりの数、訪ねてきました。文書館は、岐阜県歴史資料館がそうであるように自治体史（県史・市町村史）編さんをきっかけとして設立されたり、そうでなくとも何らかの形で自治体史編さんの「遺産」を継承したりしていることが多いと思います。例えば、編さんの過程で撮影された、史料の写真やマイクロフィルムなどを所蔵し、公開している事例が多く見られます。

そういった写真は、自治体史編さんの限られた日程のなかで、史料所蔵者の方にご協力いただいて撮影されます。「編さんのため」と、目的を限定して、撮影される場合が多いのです。そして編さん事業終了後、写真が整理・公開されても、その写真を研究のために複写したり、翻刻したりすることは許されなかったり、あらためて所蔵者のご許可を必要としたりする場合も多いのです。

もちろん、まずもって所蔵者の権利が尊重されなければなりません。しかし、せっかく広範に収集された史料の写真や、それに付随する情報が十分に活用されないというのも、もったいない話です。所蔵者のプライバシーなどに最大限配慮しつつ、編さん組織から文書館への移管に際して、改めて写真の利用に関する許諾を一括して得るなどの手だてをとることが、望ましいのではないかと思います。

さらにいえば、自治体史編さんの副産物としての、史料所蔵者の方々と結ばれた人間関係・ネットワークこそが大切なのだと思います。単なる一過性の編さん事業でなく、そういった人間関係・ネットワークの継続的な構築こそが、地域社会における史料の保存・活用のうえで重要だといえるのではないでしょうか。

史料整理のツボ　― 文書箱・封筒 ―

入れ替え前の文書箱

教育学部郷土博物館には、江戸から明治時代にかけての歴史資料（＝史料。文書や記録、絵図など）が保管されています。その点数は、約 3 万点以上に及びます。そこで 2005 年度から、史料の整理作業を始め、今年度も継続しています。昨年度は、美濃国方県（かたがた）郡木田村（現在の岐阜市内）山田家文書の整理を行いました。この山田家文書は、これまで 20 箱の文書箱（段ボール製 18 箱と金属製 2 箱）に入っていましたが、中性紙で作られた文書箱・封筒への入れ替えを行い、今は計 22 箱の新しい文書箱に収納され保管されています。

1960 年代後半から使用されていた文書箱（木田村山田家文書）

左の 2 枚の写真は、木田村山田家文書が入っていた段ボール製文書箱の一つです。箱自体が破れたりして、劣化が進んでいます。そ

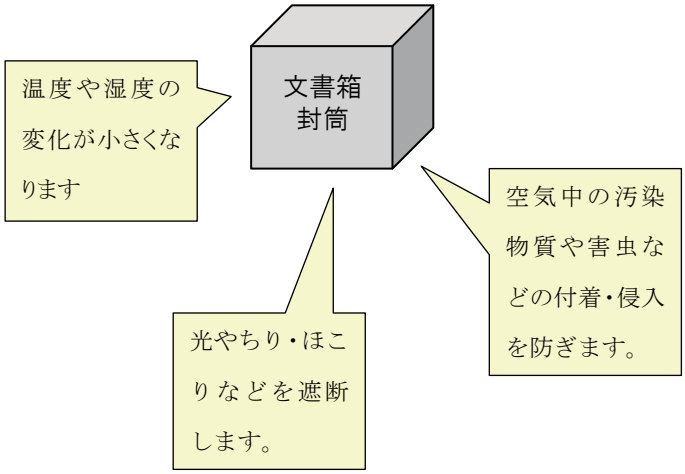
の中に、史料がそのまま収納されていました。段ボールは酸性紙の場合が多く、酸性紙は史料の保存に良くありません。「酸の移行」といって、酸性紙と隣り合う史料に酸が移り、史料を劣化させてしまうことがあるのです。酸性紙は、劣化が進むと色が茶色に変わり、紙が硬くなって、最終的にはボロボロになって崩れていきます。

文書箱・封筒の効果

史料を段ボール製の文書箱などから、中性紙製の文書箱・封筒へ入れ替えていくことは、史料の長期的な保存･活用のために重要な作業です。中性紙は、酸性紙のように史料を劣化させないので、史料の保存に適しているのです。また、郷土博物館の収蔵庫には空調施設がなく、史料の保存に良い環境とは言えません。このような中で、史料を文書箱などに入れて保管することは、史料の劣化を遅らせて、そして予防することになります（下図参照）。加えて、地震・水害・火災など災害による被害の減少にもつながります。さらに一点一点の史料を封筒に入れることは、史料自体の保護にもなりますが、封筒には文書番号などが記載できるので、史料の整理・利用の際に役立ちます。

郷土博物館に保管されている史料は、この地域の歴史を調べる上でとても大切なものです。その史料を永続的に残していくために、このような取り組みを継続していかなければなりません。

史料を文書箱に収納・保管すると、史料を劣化させる色々な要因を抑えることができます。



入れ替え後の文書箱・封筒（木田村山田家文書）

今までの整理作業で、以下の目録・通信を発行することができました。

・『岐阜大学教育学部郷土博物館収蔵史料目録(1)美濃国方県郡河渡村　村木家文書目録』
・『岐阜大学教育学部郷土博物館収蔵史料目録別冊(1)岐阜大学教育学部郷土博物館収蔵　村絵図』
・『岐阜大学教育学部郷土博物館収蔵史料目録(2)美濃国方県郡木田村　山田家文書目録』
・『岐阜大学地域科学部地域資料・情報センター　地域史料通信』創刊号

以上の目録・通信は、岐阜県内の各図書館や主な歴史博物館・資料館などへ寄贈しています。また近隣の県立図書館や、全国の大学研究室（日本史研究室）などへも寄贈しています。『地域史料通信』は、岐阜大学地域科学部地域資料・情報センターのホームページから閲覧が可能です。

飛騨国の村絵図～描いたのは誰？～

飛騨国の村絵図の特色

郷土博物館所蔵の村絵図 183 点は、2008 年度に整理を行い、『岐阜大学教育学部郷土博物館収蔵史料目録別冊（1)』として図録を刊行しました。この作業中、特に飛騨国の村絵図に注目すべき点が見つかりました。それは、同じタッチや色彩などで描かれた絵図が何枚も存在することです。

郷土博物館の村絵図の中で表紙の中山村（①）と同様な絵図は、ほかに 4 点ありました。下佐谷（しもさだに）・葛山（くずやま）・苧生茂（おいも）・双六（すごろく）村（②～⑤）で、山や道、川の彩色や、家屋や田・畑のあった場所の表現も、表紙の中山村と同じでした。これらの村は現在の高山市内（旧上宝村）にあたり、高山市内の中山村の周辺に位置しています。対して、飛騨市内（神岡町）の中山村の周辺の絵図は、郷土博物館の村絵図の中では谷（たに）村（⑭）のみでしたが、絵図のタッチなどが、明らかに異なります。そこで、表紙の中山村は、高山市内の村であろうと推測できたのです。

①中山村絵図（村絵図 142）

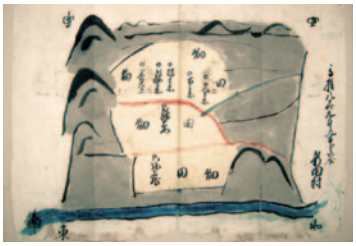
②下佐谷村絵図（村絵図 141）

③葛山村絵図（村絵図 144）

④苧生茂村絵図（村絵図 146）

⑤双六村絵図（村絵図 147）

⑥見座村絵図（高山陣屋文書、岐阜県歴史資料館所蔵）



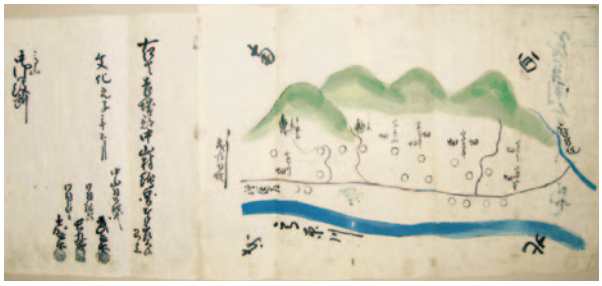
⑦新田村絵図（高山陣屋文書、岐阜県歴史資料館所蔵）

村絵図分布図（①～⑫・⑬～⑱）

岐阜県歴史資料館が所蔵する「飛騨郡代高山陣屋文書」の中にも、飛騨国の村絵図は多数あります。調査に行ったところ、表紙の中山村と同様な絵図が7点ありました。そのうち見座（みざ）・新田（しんでん）・荒原（あらはら）・蔵柱（くらばしら）・吉野・上灘（かんなた）村（⑥～⑪）は現在の高山市内（旧上宝村）で、石神村（⑫）は飛騨市内（神岡町）にあたります。郷土博物館の絵図と合わせると計12点が、同じタッチだったのです。

また「飛騨郡代高山陣屋文書」の中で、飛騨市内の中山村（⑬）の絵図と、同市内（神岡町）の杉山・横山・茂住（もずみ）村（⑮～⑰）・高山市内（旧上宝村）の一重ヶ根（ひとえがね）（⑱）・平湯（ひらゆ）村の絵図も確認でき、すべて同じタッチで描かれていました。これらの絵図は、谷村（⑭）と同様に山は緑で彩色され、家屋は〇で表現され、字名や隣村の村名、川の名前なども記されています。

このように飛騨国の村絵図には、同様なタッチで描かれた絵図がまとまっていました。表紙の中山村（高山市内）を含めた12点の絵図の作成年などは不明ですが、中山村（飛騨市内）を含めた7点の村絵図は、文化元年（1804）の作成です。これらの絵図は、何のために作られたのでしょう？



⑬中山村絵図（高山陣屋文書、岐阜県歴史資料館所蔵）

⑭谷村絵図（村絵図114）

⑮杉山村絵図（高山陣屋文書、岐阜県歴史資料館所蔵）

⑯横山村絵図（高山陣屋文書、岐阜県歴史資料館所蔵）

国土地理院発行20万分の1地勢図（高山）使用

高山陣屋へ提出された絵図

郷土博物館所蔵の飛騨国の村絵図 55 点は、高山陣屋にあった文書の一部と考えられています。このうちの 19 点は、表紙の中山村（高山市内）などを含め、作成年が不明のものです。年代が確定できるものでは、寛政 12 年（1800）のものが 1 点、文化元年（1804）と記されたものが 35 点あります。この文化元年（1804）の絵図は、岐阜県歴史資料館所蔵の「飛騨郡代高山陣屋文書」の中でも多数確認できました。両方合わせると 90 点にもなりますが、どうして多くの絵図がこの年に描かれ、高山陣屋へ提出されたのでしょう。

絵図が陣屋へ出された背景には、郡代※の交代が関係しているようです。文化元年（1804）4 月、高山陣屋の郡代に田口五郎左衛門が就任しました。他の地域でも、代官などの交代時に村絵図や村明細帳などの書類が作成されていることから、この年の絵図は高山陣屋に就任した新しい郡代のために、5 月～6 月にかけて各村々から提出されたものと考えられます。このようなことから、中山村などの作成年が不明の絵図も、郡代交代の際に提出されたものではないかと推定されます。

※比較的広域（おおむね 10 万石以上）を支配する代官（幕府などの直轄領の支配責任者）。

村絵図の作成者

文化元年（1804）の飛騨国の村絵図 90 点を、絵のタッチや色彩、紙の形・大きさなどに注目してみると、おおよそですが 20 種類ぐらいに分けられ、絵図のタッチが同じ村々は、地域的に集中しているようです。江戸時代、高山の町には「筆工（筆耕）」と呼ばれる人々がいました。彼らは村々で作成・提出される文書作成の代行をしており、誰がどの村の文書作成を請け負うかという縄張りもあったようです（冨善一敏「文書作成請負業者と村社会」、高木俊輔・渡辺浩一編『日本近世史料学研究』所収）。村絵図の作成に「筆工（筆耕）」が関わったかどうかは不明ですが、地域ごとに同じようなタッチの村絵図が作られた（＝同一人物によって描かれた）背景には、そういった縄張りの存在があるのかもしれません。

飛騨国の村々は多くが小規模で、名主（村運営の中心となる役職）が数か村に 1 人という場合が大部分でしたので、同一人物が近隣の多数の村の名主を兼任している場合がありました。7 ページ上段に 1 例をあげましたが、名主が一括して 1 人の人物に絵図作成を依頼したので、同じタッチの村絵図が作られたと思われます。また、5 ページ右・7 ページ下段の絵図のように、名主が違っても、一定のまとまったエリアの村々で、同じタッチの絵図が描かれている場合もあります。これも、各村々の名主たちが同一人物に村絵図の作成を依頼した（あるいは、縄張りの関係上そうせざるを得なかった）ためと思われるのです。

◆ 史料の閲覧

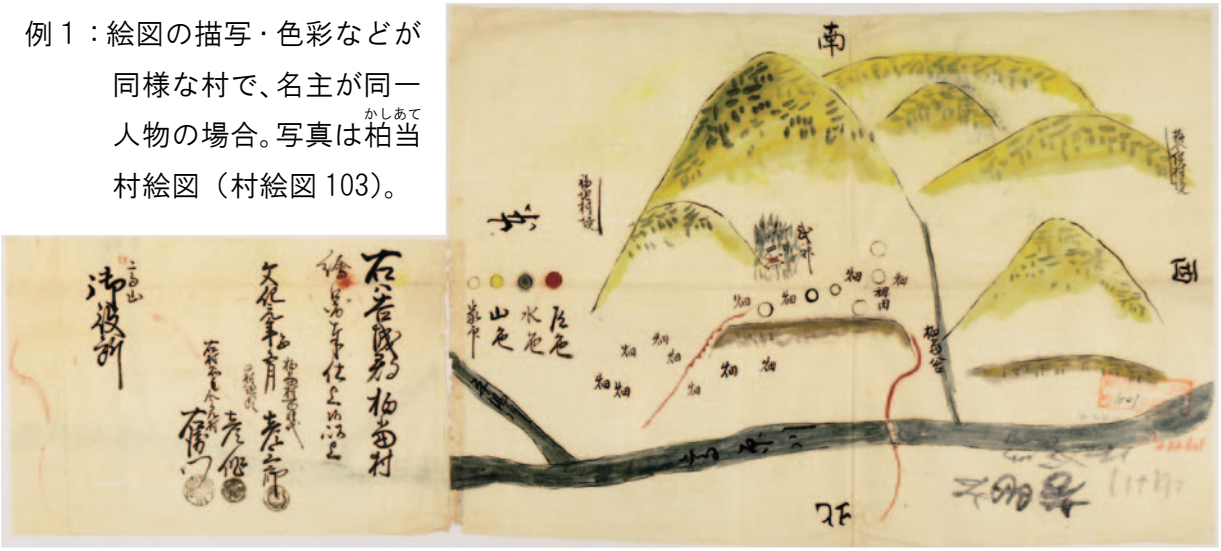
閲覧ご希望の方は、事前に下記連絡先までご連絡ください。

〒501-1193　岐阜市柳戸 1-1
岐阜大学教育学部本館 5F　郷土博物館
Tel　(058)293-2223　または(058)293-2209

◆ 史料の公開

岐阜大学教育学部郷土博物館所蔵の村絵図（もと美濃国笠松陣屋にあった文書なども含む）は、現在岐阜大学図書館機関リポジトリ（http://repository.lib.gifu-u.ac.jp/）において公開しています。どうぞ、ご利用ください。

例１：絵図の描写・色彩などが同様な村で、名主が同一人物の場合。写真は柏当（かしあて）村絵図（村絵図 103）。



絵図の描写・色彩が同様な村名	名主	現在地	描写・色彩
中尾・福地・柏当（かしあて）・笹島・赤桶（あこけ）・蓼俣（たてのまた）・神坂（かんさか）・栃尾（とちお）・今見（いまみ）・田頃家（たころけ）（10 か村）	１人	高山市（旧上宝村）	道は赤、川は濃い青、山は緑で木の表現あり、家の印は〇、田・畑は文字で、神社は絵と文字で表現、隣村は村名記載

例２：絵図の描写・色彩などが同様な村で、違う名主の場合。写真は東雲（あずも）村絵図（村絵図 113）。

絵図の描写・色彩が同様な村名	名主	現在地	描写・色彩
本郷・阿曾保（あそぼ）・東雲（あずも）・野首（のくび）・打保（うつぼ）・瀬戸・山田・丸山・小萱（こかや）・釜崎（かまさき）・西（にし）・伏方（ふせがた）・寺林・堀之内（ほりのうち）・梨ヶ根（なしね）・麻生野（あそや）・森茂（もりも）・和佐府（わさふ）・下之本（しものもと）・岩井谷（いわいだに）・伊西（いにし）・和佐保（わさぼ）・殿（との）・鹿間（しかま）・舟津町（ふなつまち）・割石（わりし）・二ツ屋（ふたつや）・吉ヶ原（よしがはら）・東漆山（うるしやま）・西漆山（うるしやま）・牧（まき）・笈破（おいわれ）・大多和（おおだわ）・佐古（さこ）・跡津川（あとつがわ）・土（ど）（３６か村）	計15人	高山市（旧上宝村）・飛騨市（神岡町）	川は濃い青、田は緑、畑は黄、道は赤、家は□、山は墨の濃淡、神社・寺院は簡略化した絵で表現、隣村は村名記載

※村名の青字は郷土博物館所蔵の、黒字は岐阜県歴史資料館所蔵の村絵図です。

交流コラム～現場から～

《木曽川学研究協議会から》

「木曽川学」とは、木曽川流域を行政と大学研究者、そして地域住民が協働して調査・研究する地域学です。平成 15 年に木曽川をはさんだ岐阜県と愛知県の各務原市・犬山市・川島町(平成 16 年各務原市と合併)・岐南町・笠松町(平成 17 年参加)の二市二町で「木曽川学研究協議会(会長 森真 各務原市長)」を設立し、各務原市に事務局(各務原市産業文化部観光文化課木曽川学係)を置いて事業活動を展開しています。

8 年におよぶこれまでの活動で講演会(81 回)やシンポジウム(9 回)、野外学習会や見学会を開催し(延べ 81 回)、15,100 名の住民のみなさんが参加されました。その成果は毎年刊行の『木曽川学研究(創刊号～第 7 号)』に講演録や調査報告、活動記録としてまとめられており、平成 20 年度には調査研究活動の中間報告書として『木曽川学論集』、平成 21 年度には木曽川学研究協議会の活動を推進する考古学・歴史学・自然環境・民俗伝統文化の各部会からなる「木曽川学研究会(委員長松田之利 岐阜市立女子短期大学学長)」が地域住民のボランティアのみなさんとともに作成した『木曽川学歴史ガイドブック』を刊行しました。

「木曽川学」の活動は、地域に暮す住民のみなさんの参加によって支えられています。これからも多くのみなさんのご参加をお待ちしています。

※「木曽川学」のご案内は各務原市ホームページ http://www.city.kakamigahara.lg.jp まで

(「交流コラム～現場から～」にふるってご寄稿下さい。)

地域資料・情報センターの活動

センターでは、岐阜県内の様々な行政情報などを収集・整理し、大学内の研究活動に寄与しています。現在は県内の市町村ごとの整理も済み、多くの自治体関係者や住民の皆様の利用にお応えできる体制となりました。また、今年退任されました竹内伝史先生より寄贈いただきました都市計画・交通関係の資料も整理が済みました。現在は、長良川河口堰などに関する資料の整理をすすめています。以上の詳細については下記ホームページをご参照ください。

編　集　後　記

『地域史料通信』第 2 号をお届けします。今年に入って、創刊号への問い合わせが出てきました。史料に少しでも興味を持ってもらえるよう、また努力していきたいと思います。今回は、岐阜県歴史資料館、各務原市観光文化課の方々からご協力を賜りました。本当にありがとうございました。多くの方々にご迷惑をお掛けすることがあるかもしれませんが、今後もどうぞよろしくお願い申し上げます。(中尾喜代美)

岐阜大学 地域科学部 地域資料・情報センター　地域史料通信　第２号

発　行　日　2010 年 10 月 28 日　　年 1 回刊行（予定）

編集・発行　岐阜大学 地域科学部 地域資料・情報センター

〒501-1193　岐阜市柳戸 1 番 1　Tel (058)293-3323　Fax(058)293-3324

http://rilc.forest.gifu-u.ac.jp/　E-mail:archives@gifu-u.ac.jp